

体験型・発信型プロジェクトを通じた日本語学習者の防災意識の変容

西坂祥平

日本で生活する際、自然災害は身近なものである。東日本大震災や熊本大地震、東広島の大雨のように、自然災害の脅威と隣り合わせの生活を送らなければならない。これは日本に滞在し、留学生生活を送る外国人にとっても同様である。留学生の中には、日本に来て初めて地震を経験する者や、自然災害が多いという知識があっても、その状況になった際にどうすればよいかわからずパニックになる可能性もある。異なる文化や言語を背景に持つ留学生が日本で生活するうえで、万一に備え、防災意識を高めておくことは必要不可欠である。

発表者は2022年度前期の留学生科目で、防災意識の向上を目指し、受講生による体験型・発信型のプロジェクトを軸とした授業実践を行った。具体的には、資料読解や映像視聴を通して自然災害について【知る】活動、学内や地域の防災施設見学や防災グッズ使用といった【体験する】活動、受講生がグループになり、留学生に向けた防災意識向上のためのガイドブックを作成し【発信する】活動である。本研究では、上記の授業実践が留学生の防災意識向上に如何に寄与するかを明らかにすることを目指す。研究課題（RQ）は次の2点である。

RQ1：授業を通して、日本語学習者の防災への意識はどのように変容したか。

RQ2：体験型・発信型のプロジェクトの中で、どのような学びが生じていたか。

調査協力者は、授業の受講生である留学生2名（以下、日本語学習者）である。日本語学習者の防災意識の変容を探るため、計3回の半構造化インタビューを実施した。1回目のインタビューは、授業序盤の【知る】活動を終えた段階、2回目のインタビューは、授業中盤の【体験する】活動を終えた段階、3回目のインタビューは、【発信する】活動を終えた段階として学期終了後に実施した。各インタビューは20～30分程度であった。インタビューはすべてICレコーダーで録音し、得られた音声データを文字化した。そして、文字化資料を繰り返し読み込み、防災意識に関する部分、授業内外での学びに関する部分を抽出した。

分析の結果、当初はメディアや知人による「日本は災害が多い国」「安全面に配慮されている」という情報を字義どおりに受け止めていたが、授業内外での協働的な活動や体験的な活動を通して、徐々に自らの経験と結び付いたものへと変容させていた。これは、バフチン（1996）の「権威的な言葉／内的説得力のある言葉」の概念によって解釈可能である。また、ガイドブック作成において、グループ内の協働や自ら想定した読み手への配慮から、必要な情報を取捨選択するなど、情報への主体的な意味付けを行っていた。同時に、情報の発信者となることで、自身を他者に貢献できる存在として捉えていることも明らかになった。

本研究は、日本語学習者の防災意識の変容の記述に加え、日本文化や日本事情の受信者に位置づけられることの多い日本語学習者が、情報の発信者として自身を有能な存在と捉える過程を描いた点に意義がある。

参考文献

ミハイル・バフチン（伊東一郎訳）（1996）『小説の言葉』平凡社ライブラリー